点眼薬の識別調査から見えてくる課題

〇関　陽子、　向井　美知子、　松永　芳子、　碇　正子、　福島　あさ子

ふくしま薬局通小路店

【目的】　眼科が門前であるため、複数の点眼薬処方であることは通常である。

患者の方からの点眼薬についての認識が様々であり、患者の方から医師への

伝言も様々である。医師の処方内容や投薬において、確認段階で患者の方と

医師との認識相違があり、投薬するまでに時間を要することが多い。

また、患者の方からの不満が発生することもある。出来るだけ、患者の方から

医師へのの伝言がスムーズにいき、服薬指導や薬剤変更を行う上で考慮すべき点を検証するために実際に点眼薬を利用されている患者の方々から点眼薬の識別調査を行った。

【方法】　2017年10月10日から１週間、午後来局された患者の方々から点眼薬の認識調査等についてアンケート調査を行った。

【結果】　期間中、アンケート回答者は103名（男性35名、女性68名）男性、女性の比率は１：２であった。男性、女性とも70歳代の方が回答されるのが多かった。アンケートすることで声を聞いてくれて「ありがとう」といただくことが数回あり、驚いた。

【考察】　以前は投薬袋による識別される方が多かったが、昨今、各メーカーは白色系への変更が多くなり、点眼薬のキゃップの色にて識別される方が多かった。案外、薬剤名を覚えている方も数名いらした。メーカーによるデザイン変更が意外と頻繁にされているため医師は点眼瓶の本体変更に気づかれることが少なく、患者の方との認識のずれがあるようだ。医師は依然として投薬袋で患者が認識していると思い込まれているのが現実のようだ。アンケート調査をすることで患者の方が私たちに話を聞いてもらえる環境が欲しいとの声があること、アンケートをすることで患者の方とのコミュニケーションが取りやすくなることがわかった。笑顔で患者の方へを傾ける姿勢が必要だということを再確認した。患者の方へ問いかけることで点眼方法の確認や患者背景の把握にも繋がると考えられる。